

ある飛行機乗りの言葉

『星の王子さま』の中で、王子さまはキツネからこんな教訓を受け取る。

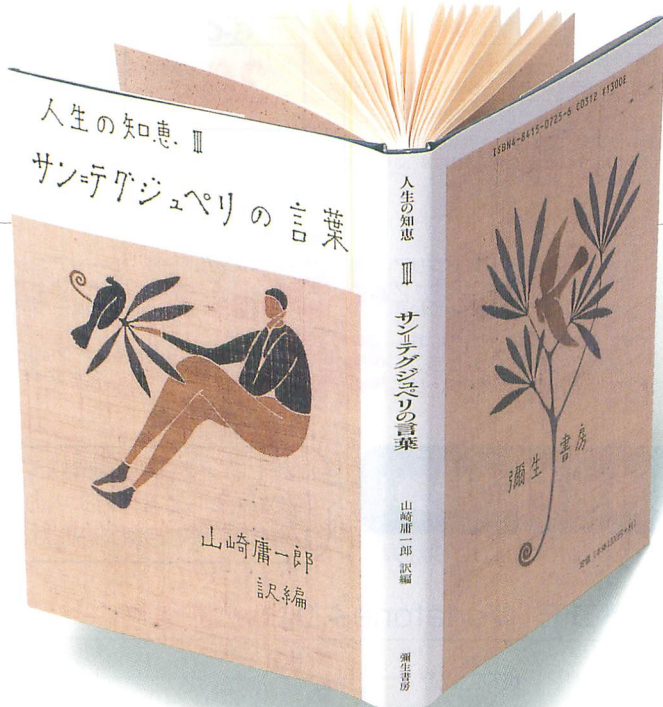
「心で見なくちゃ、ものごとは見えないんだ。かんじんなことは目に見えないだよ」

作者のサン＝テグジュペリは『星の王子さま』の作者として知られているが、本来童話作家ではない。作品の多くは、飛行機操縦士としての経験をもとに執筆されたもので、危険に直面しながら義務を遂行する人間の勇気を描いてこそ、彼の面目躍如たるところがある。

小説『夜間飛行』

Book

Text by
Koji Suzuki
Photographs by
Mitsuya Karasawa



人生の知恵
サン＝テグジュペリ
の言葉
サン＝テグジュペリ 著
山崎 庸一郎 訳編
彌生書房刊
1365円

の序文は、かのアンドレ・ジイドから頂戴していて、次のような記述を含んでいる。「人間の幸福は、自由の中に存在するのではなく、義務の甘受の中に存在するのだという事実を、明らかにしてくれたことを感謝する」

熟練の飛行機乗りだけあって、義務を遂行した結果として得られる満足感と生の充実の描写が、この本の中にはあふれ

ている。

ぼく自身、調布飛行場に通って小型飛行機の操縦ライセンスにトライした経験があり、空を飛ぶ楽しさと怖さは心得ている。ヨット乗りとしての体験も似たりよったりで、期せずして台風につかれれば、困難な局面を自力で克服せざるを得ない。しかし、危機を脱してホームポートに戻り着くや、これまで幾度となく眺めてきた風景が、別物の輝きを纏って際立ち、まさに生の充実に浸ることができる。幸福を味わう瞬間だ。

世の中にはふたつのタイプの人間がいる。一方は平凡な何気ない日常の中に幸福を見出すタイプ。もう一方は危険をはらんだスリリングな行為の中にしか幸福を見出せないタイプ。サン＝テグジュペリは明らかに後者に属するがゆえ、彼の描写するワンシーンワンシーンが身に染みてくるのだと思う。

死の危険に直面しながら義務を遂行する勇氣に人間の尊厳を求め、実際に体験を豊富に積んでいるためか、彼が書く文章には、言い得て妙、一拍おいてわかるわかると心の腑に落ちてくる文句が多くちりばめられている。そのエッセンスは、冒険飛行だけではなく、愛に関する箴言にも生きている。

「また経験はわれわれに教えてくれる。愛するとは、互いに見つめ合うことではなく、ともに同じ方向を見ることがだ、と」
*『人間の土地』の中の一文である。
*『人間の土地』新潮文庫 サン＝テグジュペリ著 堀口大孝訳

撮影・唐沢光也



夜間飛行
新潮文庫
サン＝テグジュペリ 著
堀口大学 訳
新潮社刊
580円



星の王子さま
岩波少年文庫
サン＝テグジュペリ 著
内藤濯 訳
岩波書店刊
672円

すずき こうじ／作家。
1957年静岡県生まれ。
慶應義塾大学文学部仏文
科卒業。90年、日本フ
ァンタジーノベル大賞優秀
賞受賞の『楽園』（新潮社）
でデビュー。吉川英治文
学新人賞を受賞した96年
の『らせん』（角川書店、
のちにハリウッドで映画
化もされた『リング』（角
川書店）などにより、ホ
ラー小説に新境地を生み
出す。また、親と子をテ
ーマにした作品も多く発
表している。10年ぶりの
ホラー小説『アイズ』（新
潮社）が今月刊行予定。

「自分は歯車のひとつにすぎない」が、実は誇らしい

なぜ郵便飛行士は命がけで配達したか

働く人たちのことを、「社会の歯車のひとつにすぎない」と表現する人がいます。あるいは、働く人自身が「どうせ自分は会社の歯車だから」と自嘲気味に使うこともあります。

しかし、もともと人間は誰もが社会や組織を構成する一員であり、いわばパーツです。その役割を否定的に捉える必要はなく、むしろ考えようによっては、人間としての誇りや喜びにつなげることができる。そう教えてくれるのが、サン＝テグジュペリの『人間の土地』です。『星の王子さま』で有名な作家ですが、本作も読む人に前向きさと力強さを与えてくれる名著です。

サン＝テグジュペリは作家であ

ると同時に職業飛行士であり、20代から郵便物を運ぶ輸送機の操縦士として活躍しました。30代半ばでフランス・ベトナム間の最短時間飛行記録に挑戦した際は、途中でリビア砂漠に不時着し、砂漠を3日間歩き続けて生還するという劇的な体験をしています。こうした飛行士としての実体験を踏まえて綴ったエッセイ集が『人間の土地』です。

本作の魅力が最もよく表れているのが「僚友」と題した一編です。二十数行と短いので、ぜひここだけでも読んでいただきたいくらいです。

僚友は仕事仲間を意味しますが、単なる同僚ではなく、その名のとおりに「友」でもあります。当時の飛行機は今よりずっと不安定だったので、郵便飛行士の仕事には危険が伴いました。このエッセイで

も、海の上で消息を絶ったり、雪深いアンデス山脈に墜落しながら九死に一生を得た僚友たちのエピソードが紹介されています。サン＝テグジュペリも「あの多くの共通の思い出、ともに生きてきたあのおびただしい困難な時間……（中略）……この種の友情は、二度とは得がたいものだ」と書いています。

それでも彼らには、「自分たちが確実に郵便物を届けるのだ」という強い責任感がありました。仕事を通じて社会に貢献する意識が高かったからこそ、様々な危険や困難があることを承知で空を飛んだのです。

その思いを象徴するような一文があります。

「人間であるということは、とりもなおさず責任をもつことだ。人間であるということは、自分には

関係がないと思われるような不幸な出来事に対して忤怩たることだ。人間であるということは、自分の僚友が勝ち得た勝利を誇りとするのだ。人間であるということは、自分の石をそこに据えながら、世界の建設に加担していると感ずることだ」

一つ一つが力強く、格言として書き写したくなる言葉です。

「人間であるということは」の後ろに何を入れるかと問われたとき、「他人に対して優しくあること」「誠実であること」など、人によっていろいろな言葉が浮かぶでしょう。その一つめにまず「責任」を持ってきたところに、職業飛行士であるサン＝テグジュペリらしさがあります。

四つめも、非常に含蓄深い言葉です。自分の石をそこに据える、つまり自分の仕事や役割を果たす



ことで、世界の建設に加わっているのだと実感できる。そうすれば、たとえ厳しい状況下で働かなければいけない場面であっても、誇りや情熱を保てるということです。

現在も、厳しい環境や条件のもとで仕事をしている人はたくさんいます。コロナ禍においては、医療従事者がその代表格でしょう。感染のリスクが高いことを知りながら、医師や看護師などは患者のそばで治療を続けている。もちろん医療分野以外にも、犠牲的な精神で働いている人が世の中に大勢いらつしやいます。その精神を支えているのは、やはり責任感であり、世界を建設する一員として役割を果たすべきだという使命感ではないでしょうか。

世界を建設する一員のことを、冒頭で使った「歯車」という言葉で表現することもできます。しかし、歯車はとても重要な部品です。高級時計には裏側がスケルトンに



なっているものがありますが、そこから中の仕掛けを見ると、実に精密で繊細な造りになっています。

一つでも歯車を抜いたら、時計はすぐに止まってしまおうでしょう。

それと同じで、人間が一人でも欠けたら、仕事は止まります。例えばコンビニで今日シフトに入る

予定だったアルバイトが急に休みになったら、仕事は回りません。

皆さんの仕事でも、誰かが急に休んだら大変なはずですよ。つまり私たちは、全員が社会を動かす歯車なのです。

そう考えると、むしろ歯車であることは素晴らしいと思えてきま

す。歯車は確かに替えが利くかもしれません。しかしサン＝テグジュペリが言うように、大切なのは「世界の建設に加担していると感じること」です。

自分が重要な歯車かどうかにかかわらず、目の前の仕事に責任を持って取り組み、自分も社会を支える役割を担っているのだと思えること。そこに人間であることの意味を見出せば、また明日から仕事を頑張ろうと思えてきます。

サン＝テグジュペリの言葉は、困難な時代を前向きに生き抜くための教えでもあるのです。

P



『人間の土地』(新潮文庫) = 名言出典

人間であるということは、とりもなおさず責任をもつことだ。人間であるということは、自分には関係がないと思われるような不幸な出来事に対して忸怩たることだ。人間であるという人間であるということは、自分の僚友が勝ち得た勝利を誇りとするということだ。人間であるということは、自分の石をそこに据えながら、世界の建設に加担していると感ずることだ。

サン＝テグジュペリ ● 作家、飛行士(一九〇〇～一九四四)